

エッセイ 筆を手にし、草を愛で、虫に親しむゆとり

井上 信彦 (いのうえ のぶひこ)

町内会の行事で、小学生の冬休みの宿題、書初めの仕上げをお手伝いすることになった。子供たちは会場であるマンション集会室に三々五々集まってきた。持参した書道道具一式を見せてもらって驚いたことに、墨と硯はなく、墨汁とそれを入れる丸いプラスチック容器、筆は大筆一本のみである。

「硯に向かいて墨をする」光景はなく、すぐに書き始めたのである。同伴の母親に聞いたら学校の授業では限られた時間なので墨を磨る余裕はないとのことである。子供たちは墨汁をプラスチック容器に注ぎ込んで、たっぷりと筆に蓄え、半紙に向かい、筆を立てることなくまるで鉛筆を握るような恰好で書いている。

筆の持ち方、運び方、撥ね、止めるなどの指導は、差し出がましいので最初は遠慮していたが、たまたま5年生の女兒と男児に正式な筆の持ち方と書く姿勢を注意し、それこそ手を支えて基本を教えたところ、「お手本どおりに書けた。」と驚いた。

文字を書くときの姿勢が重要であることはいうまでもない。正座する習慣が少ないことからか、でき上がった文字まできちんと座ってはいなくて、踊っている。つまり中心がずれているのである。左端には名前を書くことになっているが、学校で作ったのか、明らかにパソコンで打ち出された毛筆書体シールが準備してあった。それをまねて書き込んでいたが、大筆で書くものだから調和の取れない小文字となってしまった。全体を見て、まさに芸術的な一幅ができ上がった。だからといって決して個性的であるとの評価はできない。

墨がついたままの筆は自宅で洗うようにと学校では教えられているとのこと、墨入れはきちんとふたをしてこれも自宅で処分するようにと学校で指導されているので、今回もそのまま持ち帰ってもらった。墨を磨ること、姿勢を正すことなど、筆の処理など一連の動きが書道の基本ではないだろうか。

学校提出用の宿題は子供たちが満足する程度で一応完了したので、これ以上の干渉はやめた。

はるか昔の50数年前に小学校に通っていたころは文字を書くときの姿勢、筆の持ち方などを学校でも家でも厳しく躰けられた。子供にも同じように教えたつもりである。

義務教育である小学校、中学校でそれまでの詰め込み授業の改善のために「ゆとり教育」が導入されたのはいつごろであっただろうか。知識詰め込みだけでなく、情操教育の充実が必要からとの「ゆとり教育」であったと思う。しかし、学校教育の時間が少なくなってできてきた空いた時間は「学習塾」通いに充てられて、受験競争体制に入っている家庭もある。

最近はやとりがありすぎて学力が低下したことから見直しが行われている。

子供達の世界もデジタル化されている。携帯電話、ゲーム、パソコンを便利に使っている。自らの手で字を書く、ネットではなく辞書や書物でわからないことを調べる楽しみが少なくなったのではないかと危惧する。デジタルな面だけではなく、書道とまでいかななくても習字でいい、家でも学校でも書姿勢を正し、静かに硯に向かって墨を磨る情緒教育のゆとりは持てないものだろうか。

さらには虫に親しみ、植物を愛でる環境があれば、ゆとりある思考もできるようになるのではないだろうか。書初め指導から、自分でできなかったことを含めてゆとり教育を考えてみた。

